

杉田水脈氏の LGBT 発言を巡る諸問題についての覚書
— 英米での論点と比較して —
Some issues on the LGBT Movement
— through an analysis of the paper
by SUGITA, Mio in *Shincho 45*, August issue —

加藤知子
Tomoko KATO

I. はじめに

現職の衆議院議員杉田水脈が『新潮 45』2018年8月号に寄稿した論文が、差別的であるとして非難が高まった。『新潮 45』は2018年10月号で同論文を擁護する特集を組んだが、結局は、その特集の中の一部に「あまりに常識を逸脱した偏見と認識不足に満ちた表現が見受けられました」¹と、株式会社新潮社の佐藤隆信代表取締役社長が述べ、『新潮 45』そのものが休刊²となる事態となった。しかしながら、所謂炎上となった割には、問題の核心からずれたところでの議論が展開された感がある。本稿は、英米での LGBT を巡る争点も紹介しながら、改めて同論文を読み解くことを、その目的とする。なお、本稿では、人名後の敬称は略することとする。

II. 議論の背景 — 『新潮 45』の「杉田論文」 —

杉田水脈は、1990年鳥取大学農学部林学科卒業後、1992年西宮市役所に入所、2012年衆議院議員初当選、2017年二期目当選、2018年11月現在、現職の衆議院議員である³。現在の主な活動は、「国際 NGO の一員として活動した経験を活かし、衆議院議員として子育てや歴史外交問題に積極的に取り組む」⁴である。保守派言論空間での執筆活動も展開、公式 web サイトトップページで紹介されている著作は、2018年11月16日現在、主著・共著合計 11 である。ただし、LGBT 主題の著作は見当たらない。杉田にとっては、執筆という点では、LGBT は新分野であるということが言えよう。

大きな議論となったそのきっかけは、新潮社の『新潮 45』2018年8月号の特集、「日本を不幸にする『朝日新聞』」の中の、杉田水脈が寄稿した「『LGBT』支援の度が過ぎる」という論文（以下「杉田論文」）である。『新潮 45』8月号の特集は、『朝日新聞』（以下『朝日』）を批判するというものであり、その中で杉田は、『朝日』による LGBT 支援報道の度

¹ 「『新潮 45』2018年10月号特別企画について」

<https://www.shinchosha.co.jp/news/20180921.html> (2018年11月17日閲覧)。

² 「『新潮 45』休刊のお知らせ」<https://www.shinchosha.co.jp/news/20180925.html> (2018年11月17日閲覧)。

³ 「衆議院議員 杉田水脈公式 web サイト」<http://sugitamio.net/> (2018年11月16日閲覧)。

⁴ 「衆議院議員 杉田水脈公式 web サイト」経歴 <http://sugitamio.net/profile.html> (2018年11月16日閲覧)。

合いが行き過ぎているという論点で同紙を批判する役割を与えられたと考えられる。『新潮45』の期待に沿い、LGBT（を含む、性的少数者、以下、LGBTの表記のみでLGBT以外の性的少数者も含むこととする）の人々ではなく、彼らを巡る『朝日』の報道の在り方についての批判に終始するべきであったのに、「杉田論文」中にLGBT自身を批判する／否定的に捉えている、あるいはそもそも彼らについて知識不十分と思われる表現があり、そのために「杉田論文」に対し非難の声が上がったと思われる。本稿筆者が、「杉田論文」の中で不注意な発言だと判断した箇所を表1にまとめた⁵。

表1 「杉田論文」で不注意な発言だと判断される箇所

番号	ページ	箇所
1	57	朝日新聞や毎日新聞といったリベラルなメディアは「LGBT」の権利を認め、彼らを支援する動きを報道することが好きなようですが、違和感を覚えざるをえません。
2	58 59	例えば、子育て支援や子供ができないカップルへの不妊治療に税金を使うというのであれば、少子化対策のためにお金を使うという大義名分があります。しかし、LGBTのカップルのために税金を使うことに賛同が得られるものでしょうか。彼ら彼女らは子供を作らない、つまり「生産性」がないのです。そこに税金を投入することが果たしていいのでしょうか。
3	59	T（トランスジェンダー）は「性同一障害」という障害なので、これは分けて考えるべきです。
4	59	一方、LGBは、性的嗜好の話です。
5	59	普通に恋愛して結婚できる人まで、「これ（同性愛）でいいんだ」と、不幸な人を増やすことにつながりかねません。
6	60	Tに適用されたら、LやGにも適用される可能性だってあります。自分の好きな性別のトイレに誰もが入れようになったら、世の中は大混乱です。
7	60	最近ではLGBTに加えて、Qとか、I（インターセクシュアル＝性未分化の人や両性具有の人）とか、P（パンセクシュアル＝全性愛者、性別の認識なしに人を愛する人）とか、もうわけが分かりません。なぜ男と女、二つの性だけではいけないのでしょうか。
8	60	SNSのフェイスブック・アメリカ版では58種類の性別が用意されています。もう冗談のようなことが本当に起きているのです。
9	60	朝日新聞が「LGBT」を報道する意味があるのでしょうか。むしろ、冷静に批判してしかるべきではないのかと思います。
10	60	「常識」や「普通であること」を見失っていく社会は「秩序」がなくなり、いずれ崩壊していくことにもなりかねません。

出所：「杉田論文」より筆者作成

杉田自身、2018年10月25日付「『新潮45』8月号寄稿について」という文書（「衆議院議員 杉田水脈公式 web サイト」からダウンロード可能、以下「8月号について」）で、既に4については、性的嗜好を性的指向と混同したことを認めている。これ以外にも、杉田がLGBTについて知識不足で、それが活字に出てしまったことや、文章力の点で言葉足らずであったことについては、「8月号について」で、「自由民主党から『問題への理解不

⁵ 冒頭の番号は、本稿内で再度引用する際に用いるため、本稿筆者がつけたものである。ページ数は、「杉田論文」ページ数を表す。なお、常見陽平（2018）「自民党杉田水脈衆議院議員の『新潮45』への寄稿は不適切発言の特盛である」<http://www.yo-hey.com/archives/55713858.html>（2018年11月16日閲覧）でも、「杉田論文」中、常見が不適切だと判断する箇所を列挙している。本稿表1の2と10は、常見も不適切だとしてリストアップしているものである。

足と関係者への配慮を欠いた表現がある。今後、十分に注意するように』とのご指導をいただいていることも真摯に受け止めております」と述べている。上掲表1の2が、最も問題視された箇所であるが、「8月号について」では、「不用意に『生産性』という表現を用いたことにより誤解や論争を招いてしまったことや、結果として不快と感じたり、傷付いた方々がいらっしゃることを重く受け止めております」と書かれている。この、「生産性」を巡る議論については本稿第Ⅲ章で詳述したい。更に、3の性同一障害（Gender Identity Disorder）は昨今、性別違和（Gender Dysphoria）と呼ばれるが、この点についても、第Ⅳ章で再度触れることとする。

Ⅲ. 生産性のある LGBT

『朝日新聞デジタル』では、「自殺した LGBT の友人も…杉田氏発言に当事者から批判」⁶ や二階堂友紀の「同性カップルは『生産性なし』 杉田水脈氏の寄稿に批判」⁷等、「杉田論文」を巡る議論を紹介している。また同サイトでは、「杉田論文」や LGBT に関する一連の動きを一覧にしてまとめている⁸。一方、「杉田論文」を掲載した『新潮45』は、2018年10月号で特別企画「そんなにおかしいか『杉田水脈』論文」を組んだ。寄稿者は教育研究者で新しい歴史教科書をつくる会副会長の藤岡信勝、文藝評論家の小川榮太郎、ユーチューバーの KAZUYA（以上三名は、保守言論空間で杉田と協働する論客）、元参議院議員松浦大悟、平成探究家のかずと（以上二名は男性同性愛者）、そして、評論家で徳島文理大学教授の八幡和郎と評論家の潮匡人である。杉田自身は寄稿していない。

「杉田論文」を巡る議論の最大の焦点となったのは、上掲表1の2である。LGBTへの予算配分を批判している箇所だが、ここでは明快に、生産性の無さの定義が子供を作らないこととなっており、それに従ってこの箇所を読めば、子供を作らない者への予算配分には国民の賛同は得られないという解釈に行きつく。そこで「杉田論文」は、LGBTはもろん何らかの理由で子供を作らない者全般に対して、差別的だと非難されることとなったのである。

『朝日』等マスコミ報道の前に、衆議院議員尾辻かな子によるツイッターでの「杉田論文」批判があり、それが全国を巻き込む議論へと発展した。『新潮45』10月号の特集は、それを受けて「杉田論文」を擁護するために組まれた。しかしながら、論文自体よりは、杉田の人柄の擁護になっていたり（八幡）、尾辻かな子の対応に対する反論（かずと）や反杉田派の不寛容さの指摘（KAZUYA）やNHKによる報道への批判（潮）でもって「杉田論文」の穴を埋めようとしたり、生産性という用語は「杉田論文」以外でも使われていると論点をずらしてみたり（藤岡）など、肝心な論点、すなわち、生産性のない（子供を作らない）国民への予算配分の是非、について議論を避けているようだ。LGBTへの予算配分は慎重に、という論調が見られるのは松浦で、海外富裕層のLGBTおもてなしの一環で

⁶ <https://www.asahi.com/articles/ASL7R6Q7FL7RUTFK01N.html>（2018年11月16日閲覧）。

⁷ <https://www.asahi.com/articles/ASL7R4SB9L7RUTFK00L.html>（2018年11月16日閲覧）。

⁸ <https://www.asahi.com/topics/word/%E6%9D%89%E7%94%B0%E6%B0%B4%E8%84%88.html>（2018年11月16日閲覧）。

のトイレや温泉整備よりは、東北地方の生活再建に税金を投入するべきではないか、という主張⁹を展開している。しかしながらこれも、子供を作らないから LGBT への予算配分の優先順位は低いという「杉田論文」の論点を支持しているわけではない。なお、小川の寄稿は性的指向と性的嗜好とを混濁しており、混乱を更に増幅している。

そして、そもそも LGBT は子供を作らないというのは事実には反する。しかし奇妙なことに、この点に言及する論客がほとんど見当たらないのである¹⁰。『新潮 45』10月号でも藤岡が、「子供を作るという意味での『生産性』が LGBT の人たちにないこと自体は自明で、これに対する批判はまさかあり得ないだろうと思っていた」¹¹と断言する有様である。

LGBT が子供を持つことは可能である。B は bisexual の頭文字だが、性的指向が異性に対して向けられれば子供を授かることは可能だ。また、T (transgender) は、外見男性・内面女性、外見女性・内面男性、という二人が、生殖機能は保ったままの状態に結婚すれば、子供が生まれる可能性がある。女性性器を保ちつつ男性として生活している者が妊娠し、男性が出産した、と報道されたケースもある¹²。L (lesbian) は精子提供を受ければ妊娠できるし、G (gay) は代理母に子供を産んでもらうことも考えられる。更に、養子縁組で家族を形成することもできる。勿論、このような形での家族形成にまつわる倫理的・宗教的議論は存在する。法的な壁もあるだろう。しかし、だからといって、LGBT が子供を作らないと断言する根拠にはならないだろう¹³。

「杉田論文」が唯一税金を用いても良いとする LGBT 支援は、T の性別適合手術である¹⁴。しかしながらこれは、性器を取り除くこともあるわけだから術後子供を作ることとは不可能になる場合もある。外見と内面が一致しないのが T であるから、内面を外見に合わせられれば生殖機能はそのままだ。ところが「杉田論文」では、この可能性については触れておらず、つらい思いをしている T を救う方法は外見を内面に一致させることで、これなら（生殖機能無しでは少子化対策には貢献しないのだが）税金使用可というのである。英米では既に性別適合手術を巡っての批判的考察がなされているが、次章では、その点について簡単にまとめてみたい。

IV. T を巡る英米の論点

教会の影響力が下がってはいても、英米共に基督教国であり、経典の『聖書』には、神

⁹ 松浦 (2018、p.91)。

¹⁰ LGBT には (子供を持つ、という意味での) 生産性があるという点を指摘しているのは、常見陽平 (2018) 「自民党杉田水脈衆議院議員の『新潮 45』への寄稿は不適切発言の特盛である」 <http://www.yo-hey.com/archives/55713858.html> (2018年11月16日閲覧) である。同ページに、「LGBT のカップルと出産というのは非常にデリケートなテーマではあるが、一部の指向においては出産はあり得るのである」とある。しかし常見でさえ、そこを出発として「杉田論文」を批判する、という展開は見せていない。

¹¹ 藤岡 (2018、p.79)。

¹² 男性へと性転換した Thomas Beatie の場合は、女性性器を保ったままであったので、三人の子供を産むことができた。 <http://definenormal.com/PregnantMan/Home.html> に個人のサイトがある (2018年11月17日閲覧)。

¹³ 「『新潮 45』8月号寄稿について」でも、LGBT が子供を作らないという点については杉田は撤回していない。

¹⁴ 杉田 (2018、p.59)。

は人を「男と女に創造された」¹⁵とある。だから理屈として性別違和は罪となるのだが、『聖書』「ヨハネによる福音書」8:1-11の、姦通を犯した女性を、姦通そのものは罪としてイエスは戒めながらも、女性自身は石打の刑には定めなかったというエピソードに倣い、罪を憎んで罪びとを憎まずの信条のもと、Tの人々を助けようと努力するのが21世紀の基督者である。性別違和という（『聖書』によれば罪的）現象に苦しむのは、Tという人々自身だからである。その中で、内面を外見に合わせるよう、Tの人々を導くのが妥当であるとする基督者らがいる。実際、性別適合手術後、後悔しているT（米国人）のドキュメンタリー番組も制作され¹⁶、番組では、手術無しでそのままであれば内面が外見に一致したかもしれない人々が、自分の体験を基に、性別適合手術について慎重になるように語っている。『聖書』への言及もある。

英国の基督教系団体、Forum of Christian Leadersが、インターネット上でTに関する講義動画を配信している。講師はPeter Saunders医師で、Tを巡る諸問題を論じている¹⁷。Saundersによれば、2004年に英国ではGender Recognition Actにより、Tの人々が、自分が選んだ性別に従って生活できるようになった。その後、外見と内面の性が異なると感じる子供たちに、第二次性徴を抑える治療や、cross-sexホルモンを投与することが可能になった。2013年に、性同一障害（Gender Identity Disorder）から性別違和（Gender Dysphoria）へと名称が変えられた。これでTの状態が、医学上のメンタルなものから、常態の範囲内でのバラエティの一つ、という位置づけになったのだが、Saundersによれば、これは医学的というよりイデオロギーによるところの判断なのだという。英国の慈善団体Family Education TrustもSaundersの動画を配信しており¹⁸、この動画中、Saundersは、House of Commonsより出されたTransgender Equalityの概要について触れ、これによれば、本人の自己申告さえあれば性転換ができるようになると報告している。一方でSaundersは性別適合手術が芳しくなく、途中で治療をあきらめたTの例を挙げたり、第二次性徴を止める治療の医学上の危険性を指摘したりしている。外見を内面の性に合わせる治療の安全性と医学上の妥当性は世間で喧伝されるほど確実なものか、とSaundersは問題提起しており、それは、内面を外見に近づける選択肢を捨ててはいけないという主張に繋がっていく。「杉田論文」では、この論点についての言及が抜け落ちており、性別適合手術のみがT支援の手段であるかのような書きぶりである。そして、その手術のためならば税金を投入してもよい、と論じられているのである。

V. LGBTを巡るマーケティング

LGBTと言われる人々に対するこれまでの対応は、建前は男性・女性という二つのカテ

¹⁵ 『聖書』創世記1:27。

¹⁶ “I Want My Sex Back: Transgender people who regretted changing sex” (RT Documentary) <https://www.youtube.com/watch?v=-pxxBQm114k&feature=youtu.be> (2018年9月24日閲覧) など。ただし、RT (Russia Today) は、基督教系の報道機関ではない。

¹⁷ “What is the Transgender Agenda? - Peter Saunders” https://www.youtube.com/watch?v=9S0I5bwjm_w (2018年9月6日閲覧)。

¹⁸ “Dr Peter Saunders — The transgender Agenda” <https://www.youtube.com/watch?v=dxprkaJQNzU> (2018年11月18日閲覧)。

ゴリーの陰で、静かに彼らを支えてきたというのが実情であろう。2000年代以降、彼らを表舞台で支援するようになったわけであるが、この変化はどのように説明されるのか。前章で言及した、Forum of Christian Leaders 配信の Saunders 医師の講義では、T が注目を集めるようになった原因として、①ラディカルフェミニズム、②グノーシス思想、③クイア理論、の三つを挙げている。本稿ではここに、マーケティングという要素を加えてみたい。

日本でも、「電通ダイバーシティ・ラボが『LGBT 調査 2015』を実施」¹⁹などと題し、インターネット上で市場情報が公開されている。同調査によれば、LGBT 層の比率は 7.6%、市場規模は 5.94 兆円であるという。これに加え、LGBT 支援・支持者の消費も視野に入れ、この傾向を“レインボー消費”と名付ける、としている。実際 LGBT 関連の書籍や映画も作られているが、これもレインボー消費を見込んでのことであろうか²⁰。

LGBT 層の消費市場には、上述の「LGBT 調査 2015」によれば、22 のカテゴリーがあり、規模の大きさを一位から五位までは順に、自宅食費、車・バイク費（関連用品含む）、医療・保健費、外食費、ファッション費（衣料・靴など）となっている。

気になるのは、三位の医療・保健費である。T の人々の外見と内面を一致させるのは、内面を外見に合わせるか、外見を内面に合わせるか、の二つの選択肢がある。あるいは、両者を合わせず、そのままの自分を受け入れる、という選択をする者もいるかもしれない。この中で、二番目の選択肢を選んだ場合、性別適合手術やホルモン治療に関わる費用はもちろん、手術その他の治療による副作用、例えば、癌発症のような場合は、更なる手術や抗癌剤投与、抗癌剤の副作用を抑えるための治療など、際限ないほど医療・薬品関連の出費が続くのではないか。しかし、T の人々の外見を内面に合わせるというこの手段は、『朝日』LGBT 報道に強硬対決姿勢を見せる杉田水脈代議士も認めるお墨付きの選択肢なのだ。

ジャーナリストの堤未果は、『政府はもう嘘をつけない』で、共和党・民主党いずれの大統領候補が当選しても、米大手投資家は、自分達に利益が出るように工夫していると告発している²¹。同様なことは日本では起きないのだろうか。一見杉田水脈は、左派言論・政界人と真っ向から対決しているようだ。ところが、T の性別適合手術（そのために生殖機能が失われれば、少子化対策に反する）についての妥当性は、議論の焦点として立ち現れてこない。この T の性別適合手術支援は、「杉田論文」で唯一税金投入価値があると認めているものだが、実は、T の人々の人生をかえって不幸にする可能性があるということで、英米では既に争点になっているのにもかかわらず、である。一方、内面を外見に合わせる（生殖機能は失われない）選択肢は「杉田論文」を巡る議論の俎上に載せられない。本稿で既に触れた通り LGBT には子供を作る可能性があるのに、LGBT は子供を作らないと誤って断定した「杉田論文」に、この点で真正面から反論する者もほとんどいない。その結

¹⁹ <http://www.dentsu.co.jp/news/sp/release/2015/0423-004032.html>（2018年11月17日閲覧）。

²⁰ 例えば、“What is the Transgender Agenda? - Peter Saunders” では、T（外見男性・内面女性）を描いた *The Danish Girl* という映画を紹介している。これは、世界初の性別適合手術を受けた人物の一人 Lili Elbe についての作品である。日本でも映画の原作小説の日本語訳単行本が講談社から、文庫本が早川書房より出版されている。小説は、Lili が子宮の移植手術を受けるが、失敗してしまうところで終わっている。

²¹ 堤（2016）第一章、特に p.57 の表。

果、数あるオピニオンの落としどころは T の性別適合手術となり、これでは背後に、T 支援の名の下の、医療・保健分野におけるレインボー消費拡大を睨んだ皮算用でもあるのか、と疑いたくもなる。LGBT 支援を隠れ蓑にして経済活動にいそしむなどの主客転倒の事態に陥らないよう、国策に携わる者はもちろん、我々国民も LGBT についての知識を深める必要があると言えよう。

VI. 結語

LGBT に留まらず、性はデリケートな領域であるだけに、議論の際には特段の慎重さが求められる。「杉田論文」の最大の問題は、LGBT についての正確な情報を得る前に自らの意見を開陳したことであろう。報道・出版・政治・教育など、ことばを駆使して社会改革を進めていこうとする空間においては、議論の際には特に、心を尽くして事実を拾い上げる営みがこれまで以上に求められていると言える。

参考文献

- Ebershoff, D.: *The Danish Girl*. 2000. [デヴィッド・エバーショフ：リリーのすべて。 斎藤博昭訳，早川文庫，2016 年]
- 藤岡信勝：LGBT と「生産性」の意味。新潮 45 10 月号：77 – 83, 2018.
- かずと：騒動の火付け役「尾辻かな子」の欺瞞。新潮 45 10 月号：97 – 101, 2018.
- KAZUYA：寛容さを求める不寛容な人々。新潮 45 10 月号：108 – 109, 2018.
- 松浦大悟：特権ではなく「フェアな社会」を求む。新潮 45 10 月号：90 – 96, 2018.
- 日本聖書協会：聖書 新共同訳。1990.
- 小川榮太郎：政治は「生きづらさ」という主観を救えない。新潮 45 10 月号：84 – 89, 2018.
- 杉田水脈：「LGBT」支援の度が過ぎる。新潮 45 8 月号：57-60, 2018.
- 堤未果：政府はもう嘘をつけない。角川新書，2016.
- 潮匡人：「凶悪殺人犯」扱いした NHK の「人格攻撃」。新潮 45 10 月号：110– 114, 2018
- 八幡和郎：杉田議員を脅威とする「偽リベラル」の反発。新潮 45 10 月号：102 – 107, 2018.